



スパンキングメインの物語。剃毛、失禁を含む。最後に僅かだけセックス描写あり。性的凌辱はほぼ無し。14500文字。

取引先の社長秘書が謝罪にきたのでヴィクター・ハリソンが懲罰として漏らすまでスパンキングする話です。ヴィクター・ハリソンの視点で物語は語られます。

椎葉南(しいば・みなみ/25)・・・星菱コーポレーションの社長秘書、今回の契約交渉の失敗は彼女の資料作成ミスによる。

黒川玲(くろかわ・れい/28)・・・星菱コーポレーション懲罰課マネージャー、椎葉南の謝罪に同行。

ヴィクター・ハリソン(しっかりと体を鍛えているアメリカ企業のサディスト社長(年齢不詳))



Tokyo の夜景は、まるで宝石を散りば

めた絨毯のようだ。

高層ホテルのスイートルームのガラス窓から見下ろすこの街は、欲望と野心が交錯する戦場だ。

私はヴィクター・ハリソン、海外投資ファンドの代表として、この街のビジネスシーンで何度も勝利を収めてきた。だが今夜、この部屋でのゲームは、いつもとは少し違う趣だ。

星菱コーポレーションの社長秘書、【椎葉南(しいばみなみ)】。

彼女の名前は、今回の契約交渉の失敗とともに私の耳に届いた。

彼女の準備した資料にあった致命的なミス——私のファンドにとって、許しがたい失態だ。

だが、彼女の写真を見た瞬間、単なる怒り以上の興味が湧いた。緩くカールのかかった黒髪、透き通るような肌、鋭い知性を湛えた瞳。

この女は、ただの秘書ではない。この夜景のように、冷たくも眩しい存在だ。

部屋のドアが開き、一人のスーツを着た女性に連れられ彼女・椎葉南が現れた。

このスーツを着た女性は懲罰課のマネージャー【黒川玲(くろかわ・れい)】と聞いている。この女も黒髪ストレートヘアの美しい女性だ。

しかし、私の目は南の美貌に釘付けた。

「ほう、写真以上の美しさだな……」

黒のタイトなドレスが、彼女の曲線を完璧に際立たせている。

姿勢は完璧、だがその指先には微かな震え。

緊張しているんだな、面白い。

私はソファに深く腰を下ろし、ウイスキーのグラスを傾けながら彼女を観察する。

「椎葉南、だね？ ……以後は南と呼ぶぞ」

私はゆっくりと話し、彼女の反応を楽しむ。

「君のミスで、私のファンドは数百万ドルのリスクを負った。星菱の社長は君を信頼しているようだが、さて、君に……どれほどの価値があるのか、見せてもらうよ」

私の声には、皮肉と好奇心が混じる。

彼女は一瞬目を伏せたが、すぐに顔を上げ、私をまっすぐに見つめる。そして深々と頭を下げた。

数秒して元の姿勢にもどると、ドレスのスカートをまくり白いレースのパンティをあらわにする。

パンティの白いレース生地は薄く透けており、陰毛は綺麗に剃ってあるのが分かった。罰を受けるには良い心がけた。

「ハリソン様、私のミスでご迷惑をおかけしました。この場で、その責任を償います。どんな試練も受け入れます」

まずはパンティを見せながらの謝罪。この世界のルールもしっかりと仕込まれているようだ。

なにより、その声は震えながらも力強い。
ふむ、なかなか気骨があるじゃないか。

懲罰課のマネージャー、黒川という女が
前に出て、一礼。

黒いスーツを脱いでゆく。こちらも白い
下着だ。白いブラとパンティ、更にストッ
キングを脱ぎ置むと、床にひれ伏する。

おおっ……これは日本の最大級の謝罪
の姿勢『全裸土下座』というものか……こ
のマネージャーにも少々興味が湧いてし
まう。

全裸土下座をした黒川は説明する。

「ハリソン様、弊社の社長秘書・椎葉南は
貴方の指示に従い、特別な罰を受け責任
を果たします。彼女は自らを晒す覚悟で
『厳しい罰を』と望んでおり、ドレスの裾を
上げ懲罰を受けることを宣言いたしました。
これは、弊社ならびに彼女の責任感と
今後の覚悟を示すためです」

ほう、これはますます面白い。会社の今
後を背負って椎葉南はこの場に來たとい

うのだな。

私は立ち上がる。黒川は床に額を当てたままだ。

黒川のストイックな美しさも、なかなか魅力的だ。彼女の存在も、このゲームにさらなる緊張感を加えているようだ。

「自ら晒す覚悟、か……南。君は知的に見えて、なかなか大胆だね。だが、覚悟だけで私の信頼を取り戻せると思うなよ？」

私は彼女に近づき、わざと低く、からかうような口調で続ける。

「この夜景の前で、君の完璧な仮面がどう剥がれるか、じっくり見させてもらうよ」

南の頬が一瞬赤らむが、彼女は怯まない。

彼女の手がドレスの裾に伸び、ゆっくりとそれを引き上げる。

「ハリソン様……椎葉南、失礼いたします」

彼女はさらに、深呼吸をしながら白いパンティを下ろす。

彼女の美しさは、予想以上だ。

だが、私を惹きつけるのは、その美貌だけじゃない。彼女の瞳に宿る、屈辱と戦う炎だ。

「ふっ、なかなか絵になるね、南」

彼女のパンティを下ろす動作は、羞恥を押し殺した、どこか神聖な儀式のようだ。

「ハリソン様、これを…謝罪のひとつとして、受け取ってください」

南は、脱いだパンティを丁寧に畳み、両手で差し出してきた。彼女の声はかすかに震えているが、目は私をまっすぐ見つめている。

私は温もりの残るパンティを受け取ると、匂いを嗅ぎ、わざと広げてみる。

「白いレース、か……君のミスを償うには、刺激的な贈り物だな。そして、匂いもどこ

か刺激的でスパイシーだ」

私はニヤリと笑い、彼女の反応を楽しむ。
彼女の耳が赤くなるのが見える。

椎葉はドレスの裾を腰の位置でピンで留め、スカートをまくり上げたまま固定する。剃られてすじが丸見えの陰部と女性器が完全に晒され、夜景の光に照らされる。

「これが…この姿が、私の謝罪の証です」

彼女の声は、羞恥を押し殺した力強さを持っている。この覚悟、ただの美貌以上のものだ。私は内心で感嘆する、が容赦はしない。

「謝罪の証、ねえ」

私はパドルを手に、彼女の周りを歩く。

「君の身体をこの夜景に晒して、ミスの重さを償うつもりか？ それも刺激的ではあるな」

私はわざとからかう口調で続ける。

「だが、こんな姿を晒したくらいで私の信頼を取り戻せると思うなよ？」

私は視線を黒川に戻す。

彼女は全裸土下座のまま、動かない。ふと、ある疑問が頭をよぎる。

「黒川マネージャー」

私は彼女に呼びかける。

「その姿勢のまま答えなさい。南の陰毛、君が剃ったのか？ それとも彼女が自分で整えたのかな？」

私の声には、好奇心と皮肉が混じる。

黒川は顔を床につけたまま、冷たく答える。

「ハリソン様、椎葉南の準備は私が監督しました。彼女の身体は、謝罪にふさわしい状態にするため、私が整えました」

その声は、感情を排した厳しさと満ちている。ふむ、黒川の徹底したプロ意識、嫌いじゃない。

「ほう、君の手による仕事か。見事な仕上がりにだ」

私は笑い、椎葉に視線を戻す。

「椎葉南、君の会社のマネージャーはずいぶん厳しいな。こんな準備までさせられて、どんな気分だ？」

彼女は答えられず、唇を噛む。その沈黙が、私の興奮を煽る。

「さあ、南、準備はいいか？ その美しい尻を突き出して、君の覚悟を見せてもらうよ」

南は一瞬目を閉じ、深呼吸をする。そして、部屋の中央にある背もたれの高い椅子に近づき、両手を背もたれに置く。

彼女は腰を下げ、尻を突き出す。その姿勢は無防備で、夜景の光に照らされた曲

線は芸術品だ。

彼女の肌は緊張で震えているが、そのエロチシズムが私の興味を否応なしに掻き立てる。

だが、すぐに始めるのはつまらない。私は全裸土下座をしている黒川玲に視線を戻す。

「黒川マネージャー。私の指示を聞け」

私はソファの近くに置かれた靴ベラを指差す。

「あれを取って、椎葉の尻を打つんだ。ウォーミングアップとしてな。打つ回数は…君に任せる。彼女のミスがどれほど重大だったか、君の判断で示してくれ」

黒川は額を床につけたまま、ゆっくりと身体を起こす。彼女は全裸のまま靴ベラを取り、椎葉の背後に立つ。その動きは、まるで機械のように正確だ。

「椎葉南！」

黒川の声は氷のように冷たい。

「貴女のミスは、会社に重大な損失をもたらしたわ。この試練で、その責任を自覚しなさい。準備はいい？」

南は椅子の背もたれを握り直し、かすれた声で答える。

「はい…準備はできています。どうぞ」

彼女の尻は、夜景の光に照らされ、完璧な曲線を描いている。黒川は一呼吸置き、靴ベラを振り下ろす。鋭い音が部屋に響き、椎葉の身体が一瞬硬直する。

「ひとつ！」

黒川が厳しく数える。

「ふたつ！」

靴ベラが再び南の肌に触れ、彼女の指が背もたれを強く握る。南は声を上げないが、呼吸がわずかに乱れる。

「三つ！」「四つ！」

彼女の動きは容赦なく、南の尻に赤みが差し始める。

私はソファに座り、ウイスキーを飲みながら眺める。

「黒川マネージャー、ずいぶん厳しいな。南……君のマネージャーは君を許す気がないみたいだぞ？」

私はからかうように言うが、南は答えない。その沈黙が、逆に彼女の強さを際立たせる。じつに私の好みの女だ。

「五つ！」「六つ！」

黒川の打撃は正確にリズムを刻む。南の肌が夜景の光を照り返し、痛みと屈辱が彼女の美しさを一層引き立てる。

「七つ！」「八つ！」

私は黒川に声をかける。

「黒川マネージャー、彼女のミスはどれほど重いと思う？ まだ続けるかい？」

黒川は一瞬手を止め、南の背中を冷た

く見つめる。

「ハリソン様、椎葉南のミスは、会社の信頼を大きく損なうものでした。彼女には、徹底した自覚が必要です。…合計 18 回、打たせていただきます」

その声は、一切の妥協を許さない厳しさで満ちている。18 回、か。黒川の判断、嫌いじゃない。

「九！」「十！」

南は表情を崩さずに耐えている。これはこれで良いものだ。

黒川の打撃が続く。南の呼吸が速くなり、額や肩に汗が滲む。だが、彼女の姿勢は崩れない。

「十一！」「十二！」

少し……南の顔が歪んでいるようだ。
逆に黒川の目は、まるで南の覚悟を試すかのように鋭い。

「十三！」「十四！」

南の尻は赤みを増し、夜景の光に映える。

「十五！」「十六！」

「ふうう……あ……ああつ……」

南の指が背もたれを強く握り、かすかな悲鳴が漏れる。黒川は一切の容赦を見せず、淡々と続ける。

「十七！」「十八！！」

「……ッ！……ッ！」

最後の打撃が終わり、黒川は靴ベラを下げ、静かに一步下がる。南はゆっくりと息を吐き、背もたれを握る手がわずかに緩む。彼女の尻には、鮮やかな赤みが残っているが、その姿は気高く、美しい。

私は立ち上がり、パドルを手に取り、ゆっくりと南に近づく。

「さて、ウォーミングアップはこれで十分だな？」

私は彼女の耳元で囁く。

「黒川の前菜はなかなか刺激的だったが、今度は私が本番を味わわせてもらう。この夜景の前で、君の覚悟を、その素敵な尻に、もっと深く刻み込んでやるよ」



黒川怜の 18 回の靴ベラの打撃が終わり、椎葉南の尻には鮮やかな赤みが浮かんでいる。私はパドルを手に、椎葉の背後に立つ。彼女の突き出した尻は、完璧な曲線を描き、緊張でわずかに震えている。

だが、すぐに始めるのはつまらない。このゲームには、もう一つのスパイスが必要だ。

私の視線は、部屋の隅で全裸土下座の姿勢にもどっている黒川怜に移る。

彼女のストイックな美しさと、椎葉への容赦ない厳しさは、この舞台に欠かせない要素だ。だが、彼女もまた、このゲームの参加者として責任を負うべきだろう。私は低く呼びかける。

「黒川マネージャー。君も椎葉の監督責任を負っている。彼女のミスは、君の管理不足でもあるはずだ。自分は罰を受けないと思うなよ？」

黒川は額を床につけたまま、かすかに身体を硬くする。

「はい、ハリソン様…仰せのままに」

彼女の声は冷静だが、微かな緊張が感じられる。私はソファの横にあるテーブルに置かれたテキーラのボトルを手に取り、グラスに注ぐ。このテキーラには、特別な「仕込み」がしてある——利尿剤だ。彼女の反応を見るのが楽しみだ。

「これを飲んで、窓際に立っていなさい」

私はグラスを床に置き、彼女の目の前に滑らせる。

「君の覚悟も、じっくり見させてもらおうよ」

私の声には、皮肉と好奇心が混じる。黒川はゆっくりと顔を上げ、グラスを見つめる。彼女の手がグラスに伸び、躊躇なく口に運ぶ。だが、テキーラの強烈な刺激に、彼女は一瞬むせ返る。

「くっ…！くふう！こほっ……」

彼女の喉が鳴り、顔が歪む。だが、すぐにグラスを空にし、咳き込みながら立ち上がる。

「ハリソン様…この程度の試練、簡単なものです。きっちりと受けてみせましょう」

黒川は乱れた呼吸を整えながら、挑発的な口調で続ける。

「ですが、椎葉南にはもっと厳しい罰が必要です。彼女のミスは、私の監督を超えた

怠慢です。彼女を…存分に徹底的に責め、悔い改めさせてください」

その言葉は鋭く、椎葉に向けられた冷徹な敵意に満ちている。ふむ、黒川のこの刺激的な一面、嫌いじゃない。

黒川は全裸のまま、ガラス窓の前に進む。夜景の光が彼女の肌を照らし、彼女は黒く茂る陰毛を逆立て、尿意をこらえるように太腿を微かに締めながら直立する。彼女の呼吸は乱れているが、姿勢は崩れない。

その姿は、まるで戦士のようなのだが、私は彼女を一瞥し、内心で笑う。さて、どれだけ耐えられるかな？

私の注意は再び椎葉南に戻る。彼女は椅子の背もたれを握り、尻を突き出したまま、緊張で硬直している。夜景に照らされた彼女の尻は、黒川の打撃で赤みを帯び、まるで熟した果実のようだ。

私はウイスキーのグラスを手に、彼女に近づく。

「南、君の尻は特上の芸術品だな」

私は感嘆の声を上げ、グラスを傾ける。ウイスキーが彼女の尻に滴り、赤く染まった肌を濡らす。

液は肛門から女性器、さらには彼女の剃られた陰部にまで流れ込み、彼女の身体がビクツと震える。

「ひっ…！」

南が小さな悲鳴を上げる。ウイスキーの刺激が、敏感な肌に沁みたのだろう。彼女の声は、痛みと羞恥が混じった、しかし私には、たまらなく魅力的な響きだ。

「ふっ、南、そんな可愛い声を出されると、もっと苛めたくなるよ」

私は笑い、彼女の耳元で囁く。

「このウイスキーは、君のミスの苦さを思い出させるためのものだ。しっかりと尻と股で味わいなさい」

私はパドルを握り直し、彼女の背後に立つ。椎葉の尻は、ウイスキーで濡れて光り、夜景の光にきらめいている。彼女の呼吸は速く、恐怖と覚悟が交錯しているのがわかる。

「さて、椎葉、君の覚悟を試す本番だ」

私はパドルを軽く振り、彼女の尻に触れる。

「何回打つと思う？ 10回？ 20回？ それとも…終わりがいいかもしれないな」

私の声は低く、彼女の恐怖心を煽るように響く。

「回数は教えてやらないよ。君のミスがどれだけ重いか、身体で感じるまで、じっくり味わってもらう。」

パシーーンッ！

最初の打撃を加える。パドルが彼女の尻に鋭く当たり、部屋に響く音が夜景の静寂を切り裂く。南の身体が一瞬硬直し、背もたれを握る手が固まる。

「うっ…！　ぐうう！」

彼女の唇から、抑えた呻きが漏れる。私はすぐに次の打撃を加えない。彼女の痛みが全身に沁み、恐怖が心に広がるのを待つ。